提言

語り継ぎ、語り合い、語りかける平和活動

第22代高校生平和大使
熊本県立第二高等学校
島﨑　亜季子 さん

「日本人は中国人が嫌いなのかな」。一年たった今でも耳の奥に鮮明に残って忘れられない言葉です。そして、私が高校生平和大使に応募するきっかけをくれた言葉でもあります。私が中国を訪れたのは、高校一年生の夏のこと。ホームステイ先の高校生のこの一言は、まだアジアの歴史に疎かった私にとってはあまりにも衝撃的でした。日本と中国の戦争の歴史は過去のことだと思っていたのです。まさか私たち高校生同士の交流にもいまだに影を落としているなんて。私にとって他人事で、遠い過去のことだった戦争は、その日から私の頭の中に居座って離れなくなりました。そんなもやもやした日々を過ごしていたときに、この高校生平和大使の活動と出会いました。今こうして平和大使として活動できていることが本当にうれしく、ありがたいことだと思っています。

私は選考会の時から「語り継ぎ　語り合い　語りかける平和活動」ということを目標に、熊本で活動をしています。具体的には、過去を知り知識を得ること。仲間と話をする中で、いろんな人の意見を聞き自分の平和観を広げること。そして身の回りの人に自分の思いを伝えることで、平和について考える機会をより多くの人に作ること。八月にスイスを訪問する際にも、この三つのことを胸にとどめ現地で積極的に活動をするということを自分の中で決めていました。四日間という短い訪問ではありましたが、とても充実した実りある時間になったと思います。

特にUNIグローバルユニオンと国連でのスピーチがとても心に残っています。私は被爆者の方がご自身の辛く、苦しい経験を語ってくれる根底にある思いに焦点を当てて原稿を作成しました。スピーチの中で、「被爆者の方はもう世界中のだれ一人として被爆者になってほしくないという強い願いを持っているのです」という一文があります。その部分を話したときに、現地の多くの方が大きく頷いてくださいました。拙い英語ながらも思いが届いたことを肌で感じることができ、胸がいっぱいになりました。被爆者の方と世界を、そして軍縮の最前線にいらっしゃる方々とを結ぶ懸け橋としての役割を果たせたでしょうか。被爆者の方の存在の大きさに気づくきっかけが作れたとしたなら、それよりうれしいことはありません。

これ以外にも、国際赤十字やYWCAなど様々なところを訪問させていただきました。どの訪問先も私たちのことを温かく迎え、核廃絶・平和な世界の実現への思いに懸命に耳を傾けてくださいました。またトローゲン（スイス北東部）の高校生と交流した際にも、「日本のことはよく知らないが、被爆者の体験から核兵器が絶対に悪であり、悲しいものだということはわかる。絶対にあってはならないものだ」という意見を聞くことができました。今まで、深く戦争や平和について学んだことはない、と語っていた学生がこれほど核について重く受け止めてくれたことにとても驚くと同時に、伝えるという活動の重要性そして有効性を教えてもらったのです。

知らないことと関心がないことは同じではありません。より多くの人に知ってもらうこと。それが何より最優先すべきことだと思います。被爆者の方の体験は文化も国籍も超えて、人の心を揺さぶる力を確かに持っています。その力をどのように伝えるか。その伝え方を工夫していくことが私の使命のひとつなのかもしれません。

日本から遠く離れたスイスの地で、こうして共感を得られたことは自分の中で大きな自信につながりました。今後、活動していく中で、いろんな方にお会いすることでしょう。その機会ひとつ一つを大切にし、その場に応じた最善の伝え方を選択していきたいと思います。ビリョクだけどムリョクじゃない、私の熊本での挑戦は始まったばかりです。